長岡京市文化財調査報告書

第49冊

2007

長岡京市教育委員会

編 集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市文化財調査報告書

第 49 冊

2 0 0 7

長岡京市教育委員会

編集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

序

本市は、水と緑、そして交通の便に恵まれた街であり、太古の昔から人々が生活を営んできました。その結果、市域には長岡京跡をはじめ多くの遺跡が残され、豊かな歴史と文化を育んできました。

本書は、市域北部の今里地域に所在する今里車塚古墳において、平成18年度国庫補助事業として行った発掘調査の成果をまとめたものです。今里車塚古墳は、昭和53年に京都府教育委員会が行った発掘調査によって発見され、墳丘裾から木柱が、周濠からは笠形木製品が出土しました。これらの木製品は、発掘調査を指導された高橋美久二氏によって、古墳を飾った「木の埴輪」であることが明らかにされ、その結果、今里車塚古墳の名前を全国に広めることとなりました。高橋氏は、その後も乙訓地域をはじめ府下の埋蔵文化財行政の整備にご忠力されただけでなく、古墳や交通などの研究を精力的に行ってこられましたが、昨年11月にご逝去されました。この場をお借りして氏のご冥福をお祈りいたします。

今里車塚古墳では昭和53年の古墳発見以降、これまでに10次の発掘調査が行われてきました。今回の第11次調査では、今里車塚古墳の後円部の状況や「木の埴輪」が改めて確認されるとともに、盾形埴輪などが良好な状態で出土しており、古墳の姿を復原するための重要な資料が得られています。今後、調査研究を更に進め、今里車塚古墳だけでなく地域の古墳時代史を明らかにすることで、豊かな埋蔵文化財の活用や市民への文化的な還元を行っていきたいと考えています。

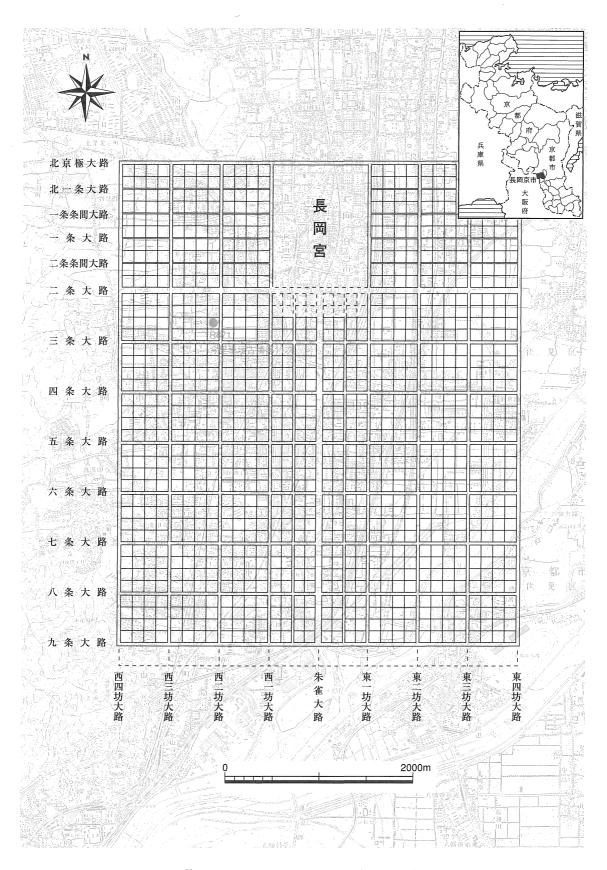
最後になりましたが、調査にあたり数々のご指導をいただいた諸先生方、調査を担当 していただいた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関、また、発掘調査 にご協力をいただきました土地所有者や近隣の皆様方に深く感謝いたします。

平成19年3月

長岡京市教育委員会 教育長 芦 田 富 男

凡

- 1. 本書は、長岡京市教育委員会が平成18年度に国庫補助事業として実施した長岡京跡右京第871 次調査・今里車塚古墳第11次調査の概要報告である。調査対象地は第1図に示した。
- 2. 長岡京跡の調査次数は、宮域、右京域、左京域にそれぞれ分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1977年)収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。
- 3. 長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号の復原に従った。
- 4. 本文の(注)に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集(1985年)に従って略記した。
- 5. 長岡京跡に関する調査の場合、正式な遺構番号は調査次数+番号であるが、本書では煩雑 を避けるため調査次数を省略している。
- 6. 本書挿図の土層の色名は、基本的に『新版標準土色帳』(1997年版)を参考にした。
- 7. 本書で用いた方位と国土座標値は、旧座標の第VI系にもとづいたものである。
- 8. 本書の執筆は、葺石の石材を橋本清一(京都府立山城郷土資料館)氏にお願いし、他は木村 泰彦が行った。また全体の編集は木村が行った。



第1図 長岡京と調査地の位置(1/40000)

本 文 目 次

長岡京跡右京第871次	(7ANIT)	T-11+M区)	調杏概要
区凹 吊贮口 吊知0/1/八	(IAIVIII		明日 水女

1	はじめに		• 1
2	調査経過		. 2
3	検出遺構		• 4
4	後円部西側	の第1段目葺石の石材	• 10
5	出土遺物		• 15
6	キレめ		. 2/

図 版 目 次

- 図版1 (1)調査地全景(西から)
 - (2) 第1トレンチ全景(北西から)
- 図版2 (1) 葺石検出状況(南西から)
 - (2) 墳丘・柱列検出状況(南西から)
- 図版3 (1)柱1検出状況(西から)
 - (2) 柱2検出状況(西から)
 - (3) 柱3検出状況(西から)
 - (4)柱4検出状況(西から)
 - (5) 第2トレンチ全景(南から)
 - (6) 周濠西肩検出状況 (東から)
- 図版4 (1) 円筒埴輪・ヒレ付円筒埴輪
 - (2) 朝顔形埴輪・形象埴輪
- 図版 5 出土埴輪
- 図版 6 (1) 出土木製品·柱
 - (2) 出土木製品
 - (3) 出土土器

挿 図 目 次

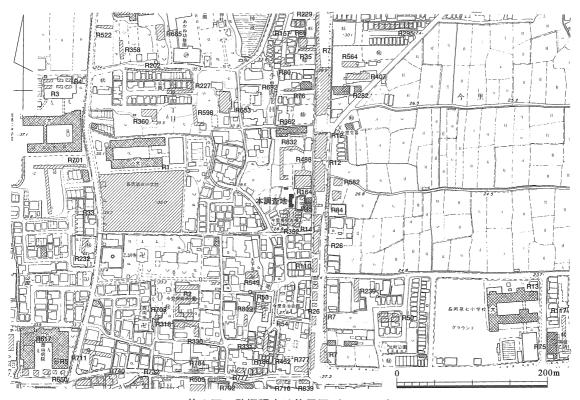
第1図	長岡京と調査地の位置(1/40000)	iii
第2図	発掘調査地位置図(1/5000)	1
第3図	発掘調査風景(南から)	2
第4図	関係者説明会(北から)	2
第5図	今里車塚古墳調査地(1/1000)	3
第6図	葺石平面・立面図及び墳丘断面図(1/50)	5
第7図	第1トレンチ平面図・断面図(1/100)	7
第8図	第 2 トレンチ平面図・断面図(1/100)	9
第9図	今里車塚古墳後円部西側の第1段目葺石の岩石名分布図	12
第10図	今里車塚古墳後円部西側の第1段目葺石の分析結果-1	13
第11図	今里車塚古墳後円部西側の第1段目葺石の分析結果-2	14
第12図	今里車塚古墳後円部西側の第1段目葺石の1 m³当たりの葺石推定数量	14
第13図	出土埴輪実測図-1 (1/6)	16
第14図	出土埴輪実測図-2 (1/6)	18
第15図	出土盾形埴輪実測図(1/6)	20
第16図	出土盾形埴輪拓影(1/6)	21
第17図	出土木製品実測図(1/6)	22
第18図	出土土器実測図(1/4)	24

付 表 目 次

長岡京跡右第871次調査(7ANITT―18地区)調査概要

1 はじめに

- 1 本報告は、2006年4月19日から2006年5月30日まで、京都府長岡京市今里四丁目11-4、11-6 において実施した長岡京跡右京第871次調査・今里車塚古墳第11次調査に関するものである。
- 2 本調査は、今里車塚古墳に関係する考古学的な資料を得ることを目的とし、墳丘部分および 周濠の検出をめざして後円部西側に第1トレンチ、さらにその北西に周濠西肩の検出を目的と して第2トレンチを設定した。総調査面積は82㎡である。
- 3 発掘調査は、平成18年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センター調査員の木村泰彦が担当した。
- 4 調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめ、近隣地域の方々に種々のご協力とご理解を 賜った。また都出比呂志(大阪大学名誉教授)、中尾芳治(京都府埋蔵文化財調査研究センタ ー副理事長)、高橋美久二(滋賀県立大学名誉教授)、和田晴吾(立命館大学)、車崎正彦(早 稲田大学)、高橋克壽(奈良文化財研究所)、橋本清一氏(京都府立山城郷土資料館)、丸川義 広(京都市埋蔵文化財研究所)、梅本康広(向日市埋蔵文化財センター)、の各氏より多くのご 教示をいただいた。また橋本清一氏には現地にて葺石の石材調査を依頼した。
- 5 本報告は葺石については橋本清一氏に執筆をお願いし、他の執筆・編集は木村泰彦が行った。



第2図 発掘調査地位置図(1/5000)

2 調查経過

過去の調査 今里車塚古墳は、1978~1979年に都市計画街路改良工事に伴って、京都府教育委 員会が実施した長岡京跡右京第12・26次調査で初めて確認された古墳である(今里車塚第1・2 次調査)。この調査では直径約46mの後円部の東半分が確認され、深さ約1.7mの周濠を持ち、周 濠幅は北側で幅約12mであることが確認された。調査当時、周辺に残る地割りや地積図などから 東側に前方部の存在が推定され、主軸を東西に向けた前方後円墳と考えられた。また『山州名跡 志』などの江戸時代の地誌には、乙訓寺の東方に「車塚」「大塚」の記載があり、大塚の方は同 じ今里の南西に「大塚」が存在すること、前述のごとく前方後円墳に推定されたことから「車塚」 がこれに当たるものと考えられて、「今里車塚古墳」と命名された。さらに出土した円筒埴輪、 ヒレ付円筒などから現在4世紀後半頃と考えられている。この他に今里車塚古墳は墳丘裾に幅約 0.5m、高さ0.5mのテラスがあり、そこに約4m間隔で柱を巡らせているという特徴を持ってい る。当時調査を担当された高橋美久二氏は、この柱と周濠内から出土した笠形の木製品が組合わ さって古墳の表面を飾っていたものと考えられ、「木の埴輪」という名称を与えられた。これら はその後各地で類例が増加し、定義や用語に差異はあるもののほぼ全国的に認知されるに至った。 . 街路改良工事に伴う調査はその後(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが行うこととなり、 1981年の右京第84次調査 (今里車塚第4次調査) では古墳のくびれ部が検出され、柱とともに 盾と見られる木製品も出土した。道路改良の後、周辺での開発は徐々に進み、その後の調査は長 岡京市教育委員会と(財)長岡京市埋蔵文化財センターが行うこととなった。1990年に後円部の南 西部で行われた右京第352次調査(今里車塚第7次調査)では墳丘裾と3本の柱が検出された。 また周濠が盾形ではなく方形に近いこと、外堤部に張り出しが存在することなど特異な形態を有 することが判明した。1995年に後円部北西で行われた右京第488次調査 (今里車塚第8次調査) でも周濠が方形になることが確認され、さらに墳丘裾と5本の柱、および方形の造り出しと外堤 に向かって伸びる墓道が検出された。また造り出しの西側からは大形の木製飾り板などが出土し ており、周辺で儀式が行われた可能性が考えられた。その後1998年には前方部北側で右京第582 次調査(今里車塚第9次調査)が行われれ、周濠外堤の延長部が検出された。ただ前方部に関



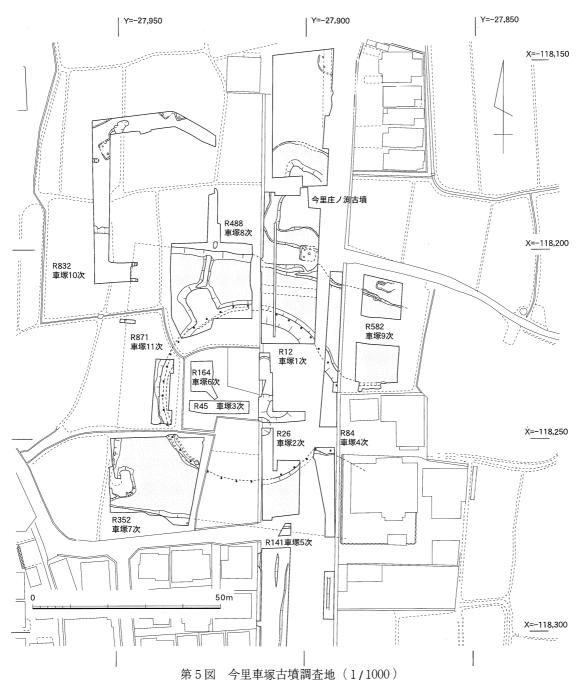
第3図 発掘調査風景(南から)



第4図 関係者説明会(北から)

しては明確な資料は得られず、規模などは不明のままで、現段階では帆立貝形古墳と推定されて いる。また2004年に古墳北西部で行われた右京第832次調査(今里車塚第10次調査)では周濠西 側の外堤が部分的に確認され、周濠西側も直線的に伸びて方形になることが判明している。

調査の契機 今回の調査は、今里車塚古墳の後円部西側に唯一残されていた畑地部分において 共同住宅建設が行われることとなり、それに伴って実施したものである。建物基礎は墳丘部分に は影響を与えないものの、後円部の状況を知り得る最後の機会でもあることから、駐車場予定部 分において国庫補助事業として調査を行うこととなった。調査は予算・期間ともに限られている こともあり、極力墳丘部分に限定し(第1トレンチ)、さらに周濠西側の状況を確認するためサ ブトレンチ (第2トレンチ) も設けた。



4 検出遺構

調査の経過 調査は4月19日から20日にかけて小型の重機を使用して第1トレンチ、第2トレンチを掘削、その後は人力にて掘り下げた。4月28日に葺石の検出状況の写真撮影を行い、転落していた葺石を除去した後、5月17日に関係者説明会を行った。5月18日に写真測量、5月23日に柱検出状況の全景写真撮影を行った。5月24日に山城郷土資料館橋本清一氏に現地にて葺石の石材調査をお願いし、あわせて柱付近の断ち割りを行った。断面図作成後に人力で断ち割り部を埋戻し、5月29日、30日の両日に重機にて埋戻しを行い、現地での作業をすべて終了した。

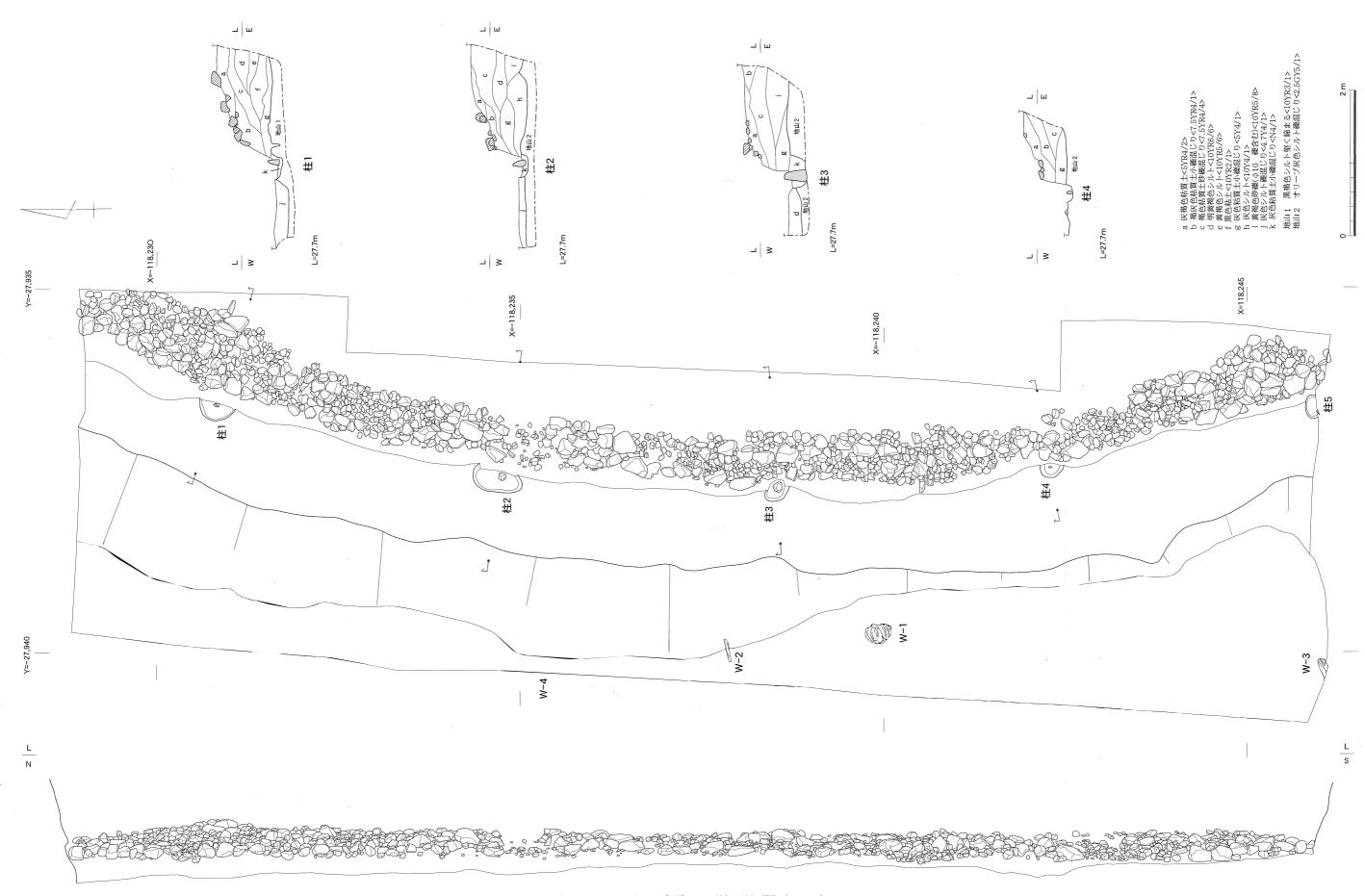
3 検出遺構

調査地の状況 今回の調査地は、今里車塚古墳の発見の契機となった道路の西側、南北に伸びる低位段丘Iの段丘崖裾付近に位置する。地形分類上は小畑川によって形成された氾濫原の西端にあたる。現在は畑地であるがそれ以前は水田としての土地利用がなされていた。現状での地表面の標高は28.6mである。対象となる土地は五角形に近い平面形を有し、現状では北東部の東西に細長く残された土地のみが道路からの進入路として使用できる状況であった。

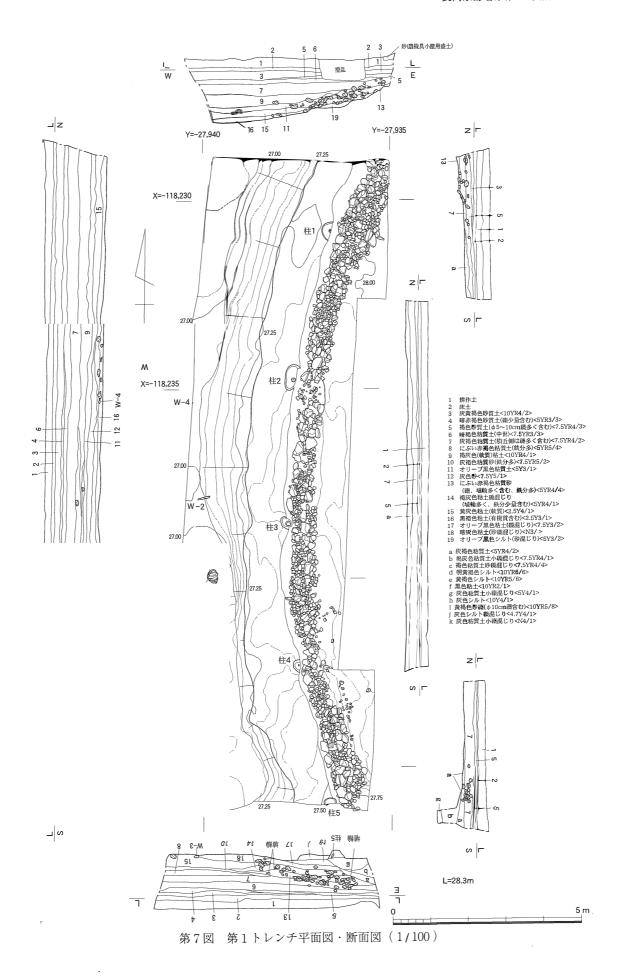
第1トレンチ(第7図) 今回の調査の契機となった共同住宅建設では、建物は墳丘部分を外れており直接的な影響は無いものと判断された。しかしながら今里車塚古墳の持つ重要性に鑑み、国庫補助事業として発掘調査を実施することとなった。トレンチは極力墳丘部分に限定することとし、これまでの調査で判明している墳丘推定部のうちの葺石・柱列が並ぶ墳丘裾付近に、南北18m、東西4mの第1トレンチを設定した(第5図)。調査は小型重機と人力で行っているが、トレンチ東の墳丘側は約0.5mで墳丘・葺石が検出されるのに対し、トレンチ西の周濠側は深さ約1.5mと深く、さらに周濠内の堆積土は大半が粘土質であるため非常に脆弱であった。そのため安全のために法面を大きく取ったことにより実際の調査面積は狭くなっている。またトレンチ東の墳丘側は葺石の延長部を追求するために、南北隅でそれぞれ約3.5m×1mの拡張を行った。これらを合わせた1トレンチの調査面積は78㎡である。

層 序 第1トレンチの層序は厚さ約0.3mの耕作土・床土(第1・2層)に下に灰黄褐色砂質土(第3層)、礫を少量含んだ暗赤褐色砂質土(第4層)が見られる。3・4層は主に周濠側に堆積している薄い層で、墳丘側ではその下に礫を多く含む褐色砂質土(第5層)が見られる。これらはいずれも水田の整地土と見られ、染付磁器片などを含んでいる。これらの下には暗褐色粘質土(第6層)および灰褐色粘質土(第7層)が存在する。第7層はほぼ全面に堆積しており、これらを除去した段階で墳丘の輪郭が確認される。第6層には中世遺物を包含しており、本調査地のすぐ南で行われた右京第352次調査(今里車塚第7次調査)でも第6層に相当するとみられる層から中世遺物が確認されている。以前の調査でも推定されたが、今里車塚古墳がこの時期に部分的に削平を受けたものと見られる。これ以下のにぶい赤褐色粘質土(第8層)、褐灰色粘土(第9層)、灰褐色粘質砂(第10層)、オリーブ黒色粘質土(第11層)、灰色砂(第12層)は周濠内に順次堆積したもので、平安時代~長岡京期の遺物を含んでいる。

にぶい赤褐色粘質砂(第13層)は墳丘の崩落土と見られるもので、ほぼ全面に見られる。葺



第6図 葺石平面・立面図及び墳丘断面図 (1/50)



石の他に埴輪片を多く含み、鉄分が非常に多い。埴輪片は小片が多く、接合できるものは非常 に少ない。褐灰色粘土礫混じり(第14層)は墳丘南半部に堆積しており、同じく墳丘の崩落土 と見られるもので、第13層に比べて礫、鉄分は少ない。また埴輪片も比較的まとまって出土し ており、接合できる資料も多い。周濠底部にはほぼ全体に厚さ約0.2~0.3mの黄灰色粘土(第 15層)が堆積しており、さらに北半部ではその下に有機物を含んだ黒褐色粘土(第16層)が薄 く堆積している。今里車塚に関連すると見られる木製品はすべてこの第15・16層の間で出土し ている。さらにトレンチ南端部にはオリーブ黒色粘土(第17層)、暗灰色粘土(第18層)、オリ ーブ黒色シルト(第19層)のいずれも砂礫を含んだ堆積層が見られるが、遺物はまったく含ま れず、古墳築造後のかなり早い段階での堆積層と見られる。

周 濠 (第6図) 先にも述べたように、今回の調査は墳丘部の検出を主眼としたため周濠部 分の調査面積はわずかである。今回検出された周濠底部の標高は南側で27.2m、北側で26.9mで、 おおむね南から北側に向かって徐々に深くなっている。この北側の深くなった部分には先述した 有機物を含んだ黒褐色粘土(第16層)が薄く堆積している。この堆積はさらに北側に広がって おり、当調査地の北で行われた右京第488次調査(今里車塚第8次調査)で確認された方形造り 出し西側の木製品が集中して検出された堆積層に繋がるものと見られる。また調査地中央南寄り の部分では、直径約1.5m、深さ0.1mでほぼ円形にわずかに深くなっている個所があり、そこか ら木製品(W1)が出土している。

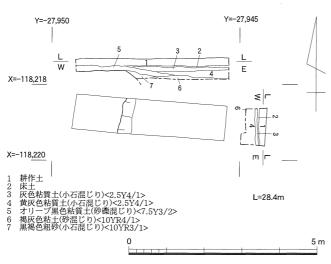
葺 石 今回検出された葺石は幅約0.6~0.9m、高さ0.3~0.5mで、きれいな円弧を描いてほぼ 推定位置で検出された。葺石上面の標高は、概ね27.9mであるが、葺石の残りが良好な北側の柱 1付近ではやや盛り上がっており28.1mである。葺石はこれまでに行われた調査と比べ残りは良 好である。柱2と柱4付近では崩落が認められ、葺石はやや希薄となっているものの、上述した 北部の柱1付近では、葺石の高さは0.5mあり、基底付近では長径0.2~0.3m前後の大形の石を長 軸を横に向けて積んでいる状況が良好に看取される。同様の状況は調査地中央部柱2と柱3の間 や、調査地南端の柱5北側付近でも見ることができる。この大形の基底石の上には直径0.1~0.2 mの小型の石を順次積み上げているが、柱3と柱4の付近では小形の石の上で大形の石が並ぶ状 況が看取される。基底石以下は葺石を持たない高さ0.2~0.3mの斜面となってテラス面へと繋が っている。なお当調査地の南側で行われた右京第352次調査(今里車塚第7次調査)では、さら にテラス部斜面でも部分的に葺石が確認されているが、今回の調査では確実に葺かれたと見られ るものは確認できなかった。なお葺石の詳細に関しては次項を参照されたい。

テラス テラス部は幅約1m前後で、葺石と同様きれいな円弧を描く。テラス面の標高は南側 では27.5mで、北側に向かって徐々に低くなり、中央部付近では標高27.35m、北側では27.25mと なっている。テラスの高さは、北側では周濠が深くなっている関係もあり約0.3mと高く、南側 では約0.2mである。テラス部斜面は北側が広く、南に行くにつれて狭くなっている。なおテラ ス幅は後述するように、柱を検出するために墳丘裾を削っているため、本来の幅は0.7~0.8m前 後となる。

柱 列 ほぼ推定個所で5本の柱が検出された。先にも述べたように、葺石を除去した段階で検出されたテラスおよび墳丘裾部では柱と掘形は検出されず、葺石基底石近くまで墳丘裾を削り込むことによってようやく検出することが出来た。このことは柱掘形は完全に墳丘盛土によって覆われていた事となり、柱の据え付けが古墳築造のかなり早い段階で行われていた事を示すものといえよう。柱掘形は墳丘盛土が覆っている事もあり不明瞭であるが、概ね円形を呈し、柱1が直径0.5m、深さ0.15m、柱2は南北が0.7m、深さ0.15m、柱3は直径0.3m、深さ0.25m、柱4は直径0.35m、深さ0.1m、柱5は直径0.4m、深さ0.2mである。柱の間隔は柱1・柱2が4.0m、柱2・柱3が3.8m、柱3・柱4が3.75m、柱4・柱5が3.75mである。

墳 丘 墳丘の構築状況に関しては、検出された柱1~4の部分で断ち割りを行い、堆積層の確認を行った。それによると柱掘形は、地山およびテラス付近の薄い明黄褐色シルト(d層)および灰色シルト礫混じり(j層)を掘り込んでおり、柱を据えた後に灰色粘質土小礫混じり(k層)で充填している。この段階での上面の標高は27.3~27.4mである。このあと柱より東側に灰色シルト(h層)、灰色粘質土小礫混じり(g層)、黒色粘土(f層)の3層で堤状の盛り上がりを作り、さらにその上に褐色粘質土砂礫混じり(c層)、明黄褐色シルト(d層)、黄褐色シルト(e 層)、黄褐色砂礫(i層)の各層を積み上げ、さらに斜面部分に灰褐色粘質土(a層)、褐灰色粘質土小礫混じり(b層)を積み上げた後に葺石を置いている。ここで注目されるのは柱とh・g・f層の関係で、柱の樹立後にちょうど柱と柱を繋ぐように堤状に積み上げている点である。このことから墳丘裾に立てられた柱は木製埴輪の支柱の他に、古墳の築造時における基準柱としての機能が考えられる。

第2トレンチ(第8図) 周濠部外堤の状況を調べるために調査地の北辺部に設けた東西4m、幅1mの調査区である。耕作土、床土(第1・2層)を除去すると、東半部では周濠内の堆積土である灰色粘質土、黄灰色粘質土(第3・4層)が、西半部では、段丘側からの流入土である砂礫混じりオリーブ黒色粘質土、褐灰色砂混じり粘土、小石混じりの黒褐色祖砂(第5~7層)が堆積している。これらを除去すると今里車塚古墳の西側外堤肩部が検出された。検出面の標高は



第8図 第2トレンチ平面図・断面図 (1/100)

28.1 mである。外堤肩はほぼ南北方向を向き、当調査地の北で行われた右京第832次調査(今里車塚第10次調査)と南側右京第352次調査(今里車塚第7次調査)で確認されている外堤肩のほぼ延長線上に位置している(第5図)。トレンチ内では段丘側からの湧水が激しく、また建物基礎への影響などから、周濠の掘り下げは約0.2 mで中止した。第2トレンチ内では遺物の出土は見られなかった。

4 後円部西側の第1段目葺石の石材

(橋本清一)

(1) はじめに

1978年度に今里車塚古墳の第1次調査で検出された後円部の現位置をとどめている葺石について、岩石名、大きさ(長径・中径・短径)、重さ、円磨度、風化度、その他の特徴を測定し、さらに、長軸の伸びの方向と傾斜、中軸の伸びの方向と傾斜を測定した。本古墳の周辺の河川の現河床礫や旧河道の河床礫を測定し、葺石の採取地域を推定した。また、葺石の葺き方を考察した(注1、2、3)。その後、本古墳の葺石は、1980年の第4次調査で北側のくびれ部に、1990年の第7次調査で後円部の南西部に、1995年の第8次調査で後円部の北西部に、第1段目と部分的な第1段目より下に、現位置石が検出されている。また、1998年の第9次調査で北側の前方部で崩落石ではあるが葺石が検出されている。今回、2006年の第11次調査で後円部の西側に、第1段目葺石の現位置石が検出されたので、その石材について、1978年度と同じ方法で実施したので報告する。

(2) 葺石の石材

章石の岩石名としては、次の7種類である。丹波層群のチャート、砂岩、頁岩〜粘板岩(珪質を含む)、緑色岩(輝緑凝灰岩)と、それらを貫く脈石英、花崗岩質アプライト(半花崗岩)、 玢岩である。

章石の岩石名分布図を、第9図にしめす。基底石(根石)と、基底石を除く葺石には、上記の 7種類の岩石名のものが使われており、基底石は、砂岩が最も多く、次いでチャートが多く使われ、その他の岩石名のものが少し使われている。

基底石を除く葺石は、任意に130個について、測定し分析をした。チャート43%、砂岩25%、緑色岩10%、頁岩〜粘板岩9%、花崗岩質アプライト8%、玢岩3%、脈石英2%である。(第10図)

章石の長径・中径・短径の3軸単純平均径を岩石名毎にみると、チャートは、24~3 cmの範囲に分布し、11~8 cmと8~6 cm程度のものが最も多く、次いで14~12cm程度が多く、両側に減少する。砂岩は、29~6 cmの範囲に分布し、20~18cmと11~9 cmが多い 2 つのピークがあり、両側に減少する。頁岩~粘板岩は、8~6 cmのものが多く、次いで11~9 cmが多く、17~15cmのものが次いでみられる。緑色岩は、20~6 cmの範囲に分布し、11~9 cmが最も多いピークをなし、8~6 cmと反対側の14~12cm、17~15cm、20~18cmと減少する。玢岩は、14~6 cmの範囲に分布し、11~9 cmをピークとして、両側に減少する。花崗岩質アプライトと脈石英は、個数が少ないので、全体の傾向をみると、29cmと23cmと20cmのかなり大きなものと、20cmと20cmのかなり大きなものと、20cmと20cmのかなり大きなものがみられる。(第200回)

葺石の3軸単純平均径を大きさだけでみると、 $29\sim24$ cmの極めて大きなものと、 $23\sim15$ cmの大きなものと、 $15\sim6$ cm程度の小さなものがみられる。(第10図)

基底石の3軸単純平均径を大きさだけでみると、葺石と同じように29~24cmの極めて大きな

ものと、23~15cmの大きなものがみられるが、それ以下の大きさのものはほとんどみられない。 葺石の円磨度を岩石名毎にみると、チャートは、0.4~0.6の範囲に分布し、0.4が最も多く、0.6

にむかって減少する。砂岩は、チャートにくらべて、円磨度が若干進んだ0.4~0.5をピークとし て、0.4と0.6の両側にむかって減少するように分布する。頁岩〜粘板岩は、0.6と0.5をピークとし て、0.4にむかって減少するように分布する。緑色岩は、0.4と0.4~0.5程度の円磨度が低いものが 多く、0.5~0.6と0.6程度の円磨度がやや進んだ高いものは少ない。花崗岩質アプライトは、0.4の ものが多く、0.6程度までのものが次いで同程度に分布する。玢岩は、0.4~0.6程度のものがみら れる。脈石英は、0.4~0.6程度のものがみられる。(第10図)

葺石の円磨度を岩石名に関係なくみると、円磨度が低い0.4が30%、0.4~0.5が28%と多く、円 磨度がやや進んだ高い0.5が18%、0.5~0.6が9%、0.6が14%であり、円磨度が進んだ高い0.6~ 0.7は1%と少ないような分布をする。基底石の円磨度も、ほぼ同じような分布をしている。

葺石の風化度を岩石名毎にみると、チャートと脈石英は、全て新鮮で風化していない。砂岩は、 新鮮から弱風化程度のものがみられるが、中風化のものはみられない。頁岩〜粘板岩、花崗岩質 アプライト、玢岩、緑色岩は、新鮮なものが多いが、弱風化から中風化程度のものもみられる。 (第10図)基底石の風化度も、葺石と同じような分布をするが、中風化まで進んだものはみられ ない。

(3) 古墳内の場所毎に異なる石材と葺き方

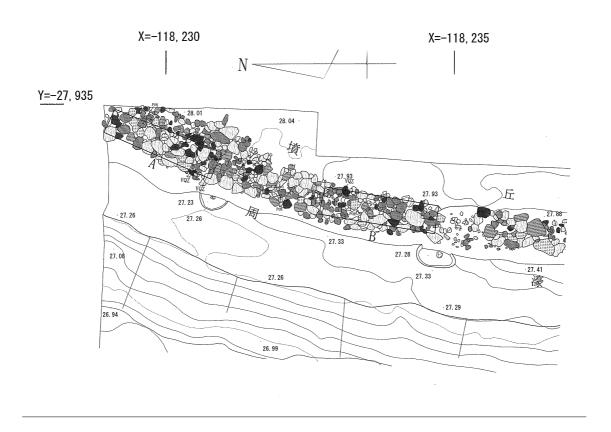
葺石の岩石名の分布が、本古墳内の場所毎に異なることがより明確となった。特に数量の多い 砂岩とチャートやその他のものについて比較する。第1次調査の後円部の北側では、砂岩54%、 チャート26%、緑色岩7%、玢岩9%、頁岩~粘板岩2%、ホルンフェルス1%、花崗岩質アプ ライトと脈石英1%である。後円部の南側では、砂岩70%、チャート13%、緑色岩14%、玢岩 1%、頁岩〜粘板岩とホルンフェルス1%である。第7次調査の後円部の南西側では、第1段目 の葺石は、砂岩49%、チャート37%、緑色岩6%、玢岩6%、頁岩~粘板岩2%、脈石英と花崗 岩質アプライト2%である。今回の第11次調査での後円部の西側では、砂岩25%、チャート43%、 緑色岩10%、頁岩〜粘板岩9%、花崗岩質アプライト8%、玢岩3%、脈石英2%である。また、 第9次調査の前方部の北側では、崩落した葺石ではあるが、砂岩52%、チャート40%、緑色岩 4%、玢岩2%、頁岩~粘板岩とホルンフェルスと脈石英は各1%である。

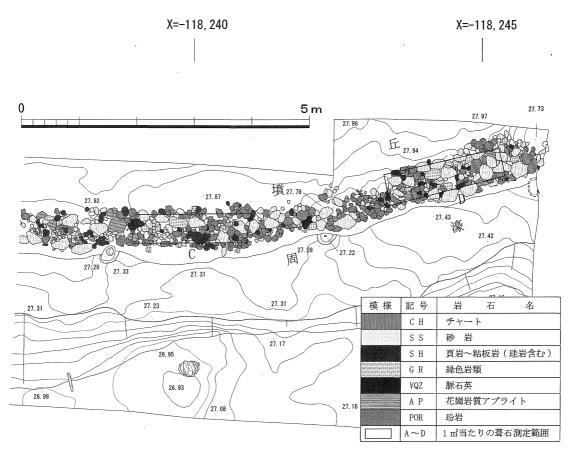
このような岩石名の明確な有意の差異は、当時の小畑川の支流の善峰川での河床礫の採取地域 が中~下流に広がることが大きな理由であり、次には、本古墳での葺石の置き場所が分散してい たと推定される。また、葺石の葺き方も場所により異なるが、別の稿にしたい。

今回の第11次調査での第1段目葺石の1m²あたりの推定葺石数量は、約145~約168個であり、 平均で約155個となる(第12図)。

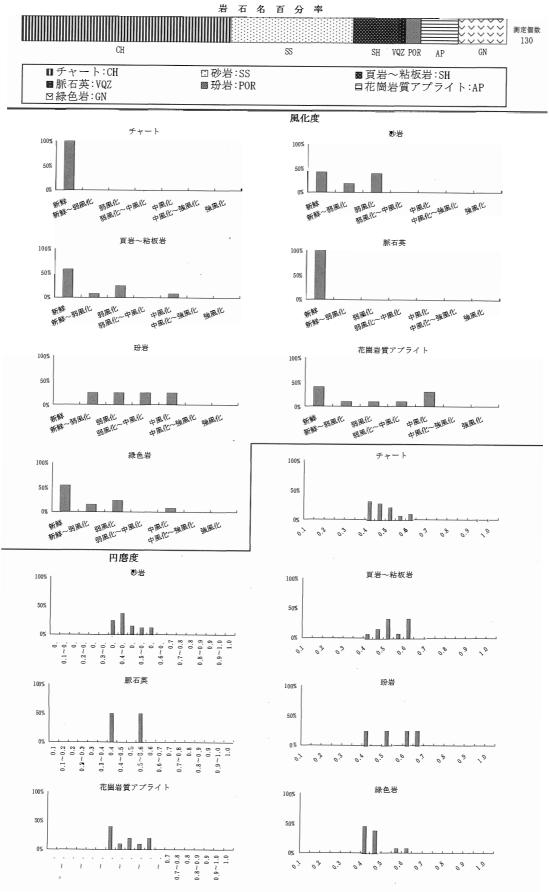
(注1、2) 橋本清一(1980)「京都府乙訓地方における古墳の葺石の石材」[1980-2] 埋蔵文化財発掘調 查概報、76-85、167-185、255-261、273-275、349-376。

(注3) 橋本清一(1993)「古墳葺石の材質研究」考古学と自然科学、第28号、25-44。

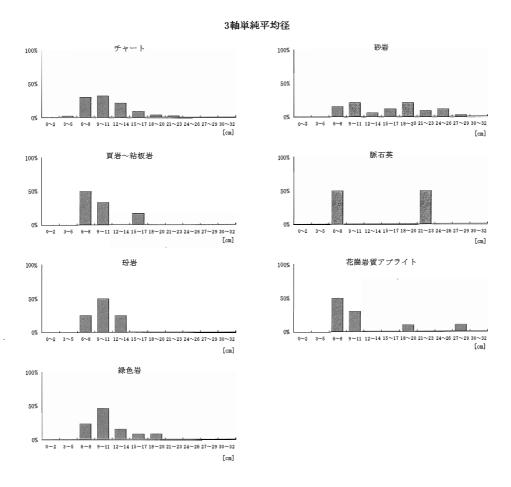




第9図 今里車塚古墳後円部西側の第1段目葺石の岩石名分布図



第10図 今里車塚古墳後円部西側の第1段目葺石の分析結果-1



第11図 今里車塚古墳後円部西側の第1段目葺石の分析結果-2

区域	現位置残存数	推定欠落数	推定合計数
A	88個	約58個	約146個
В	115個	約45個	約160個
С	133個	約35個	約168個
D	106個	約39個	約145個

第12図 今里車塚古墳後円部西側の第1段目葺石の1 m²当たりの葺石推定数量

出土遺物 5

今回の調査で出土した遺物はコンテナにして14箱あり、そのうち量的に最も多いのが埴輪類で、 11箱を占めている。大半は円筒埴輪、ヒレ付円筒埴輪、朝顔形埴輪の破片で、他に盾形埴輪、 蓋形埴輪、冑形埴輪などの形象埴輪がある。次いで周濠内出土の木製品と柱が2箱、その他長岡 京、平安、鎌倉、江戸時代の土器片などが1箱となっている。埴輪は転落石とともに出土したも のが大半で、多くが表面が摩滅し接合不可能な破片であるが、今回は比較的まとまって出土した ものも見られる。また周濠内の堆積土から出土した破片は比較的残りが良好で、表面の調整が看 取できるものが多く、赤色顔料が残るものも見られる。出土位置はおおまかに調査地の南部、中 央、北部に分け、さらに葺石を規準として上段、下段としているが、大半は南部に集中している。

円筒埴輪(第13図) 出土した埴輪の破片の中では最も多いが、当然ながらヒレ付円筒埴輪や 朝顔形埴輪の体部片も含んでおり、区別は困難である。体部外面は基本的には1次調整の縦ハケ の後に2次調整のA種横ハケを施すもので、明確なB種横ハケは確認できない。

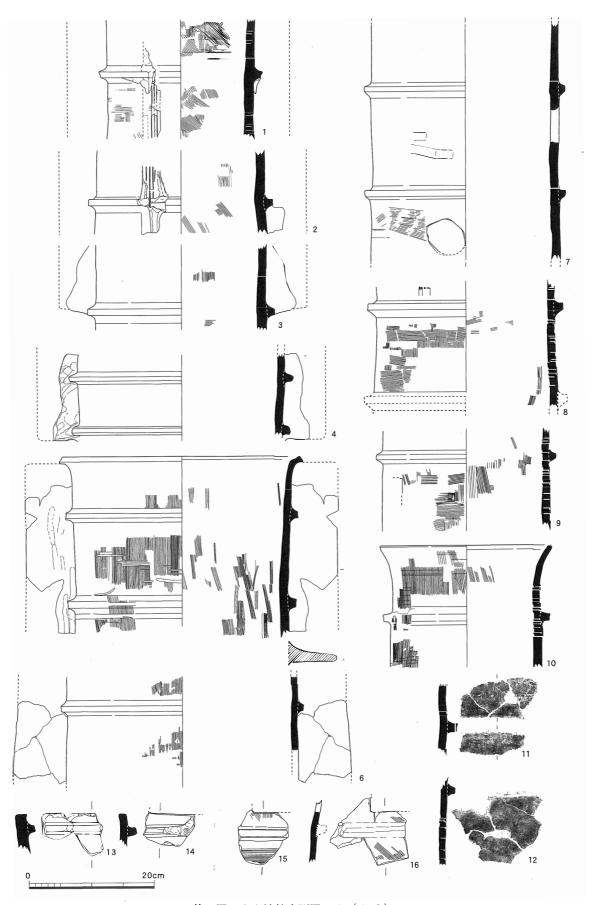
7は今回出土した円筒埴輪の中では最も大きく復原できたものである。調査地南部下段の柱 4 ・ 5 周辺には転落した埴輪片が集中する個所があり、そこから出土したもののひとつである。 口縁部、底部ともに欠いているが、2条の突帯を残した体部片である。体部径は29.6cmである。 突帯は全体に摩滅するが、上面のナデが強いタイプで、突帯の間隔は約17cmである。段の中央 やや上よりには円形の透かし孔が穿たれ、さらに上の段には約90度の方向に同様の透かし孔が穿 たれる。内外面ともに摩滅が著しいが、透かし孔周辺で横方向のハケメが確認できる。

8も南部中央よりの下段から出土した体部片で、直径は約28.5~29cm、突帯は9とほぼ同じ特 徴を持つ。表面の残りは良好で、内面は縦方向のハケの後ナデ、外面は縦方向のハケの後、部分 的に横方向のハケメを施す。突帯は2条確認できるが、1条は剥離して縦方向のハケメが確認で きる。突帯の間隔は約15cmである。透かし孔は確認できない。

9 は南部下段から出土したもので、断面台形を呈する突帯を持つ。体部径は26.6cmで、内面は 縦方向のハケメを施し、部分的に横ナデが認められる。外面は縦ハケの後横ハケを施している。 体部には方形の透かし孔の一部が残される。

10は中央部上段出土のもので、緩やかに外反する口縁部を持つ。口縁端部は横ナデにより尖 り気味に仕上げている。口径は27.6cm、体部径は24.4cmである。口縁部の下約11cmの個所には断 面方形を呈する突帯が貼り付けられているが、剥離した部分では方形の刺突痕が認められる。内 面は剥離するが口縁部付近に縦方向のハケメが確認される。外面は縦方向のハケメで横ハケは部 分的にわずかに確認できるのみである。

11・12は表面の残りが良好な破片であるため、拓影と断面図を示した。11は南部上段出土の もので、1次調整の縦ハケが明瞭に残り、外面には円弧状と直線の2条の浅い線刻が確認できる。 内面は縦ハケの後ナデである。12は南部下段出土。斜方向のハケメで調整するもので、内面も斜 方向のハケの後ナデ調整している。



第13図 出土埴輪実測図-1 (1/6)

13~16は透かし孔の確認できる破片を図示したもので、いずれも方形透かしと見られるもので ある。13は南部下段出土の厚みがある体部で、突帯のすぐ上に8cm以上の開口部がある。この 破片ではハケメは確認できず、形象埴輪片の可能性も考えられる。14も透かし孔の幅は7cm以 上となるもので、方形を呈する突帯は大きく突出する。内面横ナデ、外面は突帯の下にはわずか に縦ハケが残る。中央部上段出土。15は南部上段出土で、透かし孔幅は3.5cm以上である。透か し孔周辺には縦ハケ、突帯下には2次調整の横ハケが残る。内面は縦ハケである。16は中央下段 南部よりで出土した。非常に薄い体部を持つもので、透かし孔は4cm以上、内外面とも斜方向 のハケメである。12の破片と同じ特徴を有するものである。

これまでに行われた調査と同様、比較的多くのヒレ付円筒埴輪片 ヒレ付円筒埴輪(第13図) が出土している。調整や突帯の特徴も基本的に円筒埴輪と同様であるが、突帯はヒレ付近では貼 り付け時のナデにより丸みを帯びているものが多い。体部の直径は破片からの復元のため多少の 誤差はあるが、23~27 cm前後のものと、33~37cm前後のものに分かれるようである。出土箇所 は4が南部上段以外すべて南部下段の埴輪集中箇所出土である。

1は最も体部径が小さいもので、23.5cmに復元される。突帯は台形で、上部がやや突出してい る。ヒレは完全に剥離しているが、貼り付け部分には縦方向に4条の深い刻み目を入れている。 外面は縦ハケの後横ハケ、内面は斜め方向のハケで調製している。突帯の裏側部分には貼り付け 時のオサエ痕が残る。

2はわずかにヒレの基部が残された破片で、1と同じくヒレの剥離した部分には4条の深い刻 み目が入れられている。外面はヒレ周辺は貼り付け時のナデ、体部は横方向の板ナデで、内面は 縦方向と斜め方向のハケメで、突帯の裏側部分は指オサエ痕が残る。体部径は26.6cmである。

3はヒレの下端部分周辺の破片である。ヒレの基部は突帯の下部で終わっており、貼り付けの ナデが残る。ヒレは欠失のため幅は不明であるが、残存部分での厚さは約1cmである。内面に は縦ハケが残り、外面は摩滅のため、調整は不明である。体部径は27cmに復元される。

4も同じくヒレの下端付近の破片であるが、突帯は2条分が残されている。突帯の間隔は約8 cmで、かなり狭いものとなっている。突帯はヒレの貼り付け時のナデ調整によって丸みを帯び た断面形となっている。ヒレの下端は突帯下部よりやや下に位置する。表面は遺存状態が良好で 外面全体に赤色顔料が残る。ヒレ部分はナデ調整、外面は板ナデによる調整、内面はナデ調整で ある。直径は33cmである。

5 は今回出土した中で唯一口縁部が確認できたヒレ付円筒埴輪である。口縁部は鋭く外側に屈 曲しており、端部はヨコナデによって外傾する面を作り出す。口縁部の下約 9 cmの箇所に突帯 があり、さらに約14cmの間隔で2条目の突帯がある。突帯は断面台形を呈し、剥離した部分に は縦ハケの後の強いヨコナデが残されている。ヒレは幅7.6cmで、厚さは先端付近で1.2cm、基部 付近で2.5cm、端部は丸みを帯びている。ヒレは全面ナデ調整。体部の外面は縦ハケで、部分的 に突帯貼り付け時についたものと見られる横方向の線状の凹みが残る。内面は縦ハケである。外 面には黒斑が残る。口径39cm、体部径は34cmである。

6 は今回出土したヒレ付円筒埴輪の中で最も大きなもので、体部径が37cmのものである。ヒレの幅は7.9~8.4cm、厚さは約1cmである。ヒレは全面ナデ調整、体部外面には縦ハケがわずかに残されているが、内面は摩滅しており、調整は不明である。

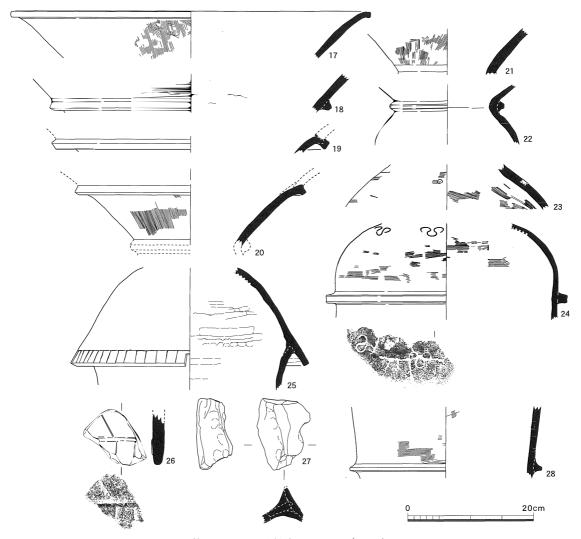
朝顔形埴輪(第14図) 朝顔形埴輪は口縁部、頸部、肩部が出土しているが、これらがすべて 接合出来るものは確認できなかった。また墳丘樹立時に風雨を受けているためか、口縁部内面は 著しく摩滅しているものが多い。

17は唯一口縁部が図示できたもので、大きく直線的に開いて、先端でわずかに屈曲させている。端部はヨコナデによって平坦面を作る。外面には縦ハケが残るが、内面は摩滅しており不明である。口径は58cmである。南部下段の埴輪集中箇所出土。

18は屈曲部突帯とその上の口縁部片で、表面の残りは比較的良好である。内面には粘土貼り 付け痕が残り、外面は横方向の板ナデである。突帯部の直径45.4cm。南部上段出土。

19は接合部分に斜め方向に刻み目を入れたもので、上部に口縁部を積み上げた後突帯を貼り付ける。突帯周辺はヨコナデ、内面は摩滅する。突帯部の直径44.3cm。中央部上段出土。

20は屈曲部突帯から頸部にかけての破片で、屈曲部の接合部分には斜め方向の刻み目を持つ。



第14図 出土埴輪実測図-2 (1/6)

頸部付近にはの突帯の剥離痕がわずかに確認できる。内面は摩滅、外面は縦ハケで、赤色顔料が 部分的に残る。突帯部の直径37.4cm。南部下段出土である。

21は頸部から上の破片。外面は縦ハケで、赤色顔料が付着する。下部には突帯貼り付け時のヨ コナデが確認できる。内面は摩滅しており、調整不明。頸部の直径15.8cm。南部下段出土。

22は頸部から肩部にかけての破片で、肩部は丸味を帯び、頸部はくの字状に屈曲しており、口 縁部は直線的に大きく開いている。頸部には断面台形を呈する突帯を貼り付けており、突帯上面 は強いナデによりわずかに凹んでいる。内面は荒れているが、外面にはわずかにヨコハケの痕跡 が残る。突帯部の直径37.4cm。南部上段出土。

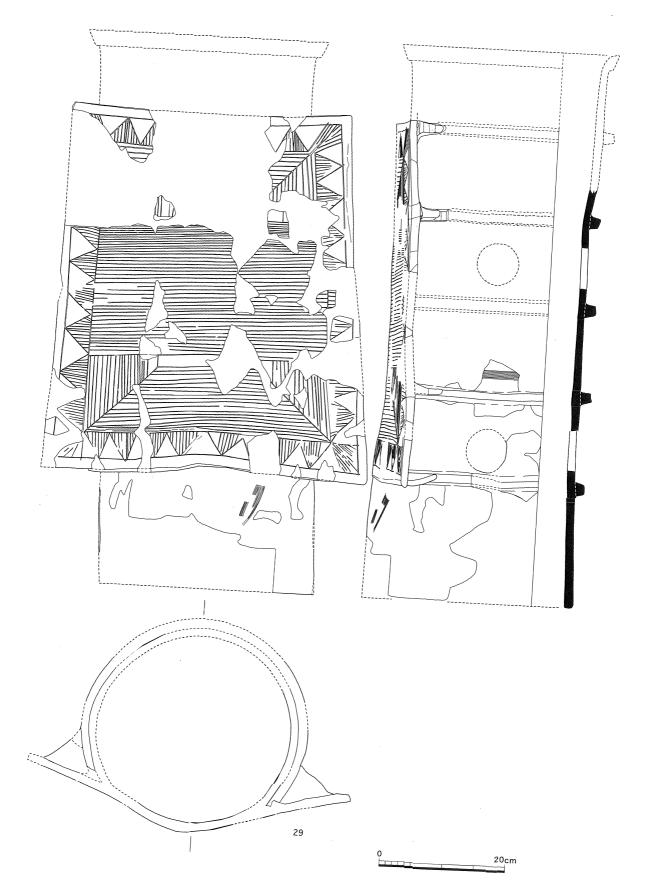
23は肩部の破片であるが、外面に竹管によると見られる円形の刺突が認められる。刺突は直径 8mm、深さ5mmで、破片で確認できるのは1カ所のみである。外面はヨコハケがわずかに残り、 頸部付近にヨコナデ、内面は斜方向のハケメと頸部付近にナデが確認される。

24は南部下段の埴輪集中箇所から出土した肩部から体部の破片で、遺存状態は比較的良好であ る。肩部は丸味を帯びて大きく張りだし、体部との境界には断面方形の大きく突出する突帯を巡 らせる。内外面とも表面は荒れているが、横ハケが残されている。この埴輪の特徴は肩部上方に 竹管を組み合わせた刺突文を施している点である。文様は直径約1.7cmの竹管の約1/3程を削いで C字形にした原体を、開口部が上になる形で押し当てた後、その左右両側に今度は開口部が下に なるように連続するように組み合わせたものである。破片では2組認められ、間隔は5.6cmであ る。この特徴的な刺突文は京都府与謝野町谷垣遺跡出土の特殊円筒棺口縁部に施された例が知ら れる。組み合わせ方や竹管の大きさなど文様自体は非常に類似しているが、器形が大きく異なり、 施文箇所や傾きなどにも相違があり、今後検討すべき点である。

冑形埴輪(第14図-25) 乙訓地域では初めての出土となるものである。当初は蓋形埴輪と見 られたが、上部の角度が異なり、わずかに衝角部の表現が確認できたことから冑形埴輪と判明し たものである。冑本体と基部からなり、冑は錣以外に地板などの表現は見られない。錣は端部か ら約2cmの部分に平行する直線を刻み、さらに直行する線を1.4~2cm間隔で刻んで連続する方 形の区画を作る。その後この各方形区画の左上部隅に、板状工具の角を押しつけて凹ませ、段差 を作り出している。錣の端部には約2cmほどの切り込みが認められ、その付近から上部の湾曲 がわずかに変化していることから衝角部になるものと判断された。冑本体は外上方に大きく開く 基部の上に粘土紐を積み上げて作られており、内面には粘土紐痕、指圧痕、ナデ調整の跡が明瞭 に残る。外面は非常に丁寧なナデにより平滑に仕上げられている。天井部分と基部を欠いている が、現状での高さは20.3cm、直径は38cmである。南部下段の埴輪集中箇所から出土した。

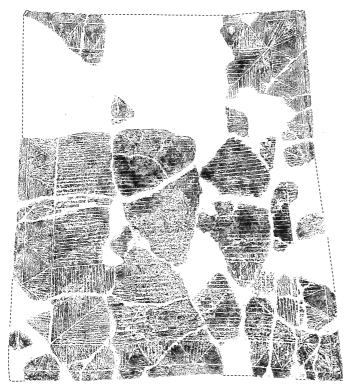
形象埴輪(第14図) 26は表面に段差を作り出すことによって、連続する方形とやや斜め方向 の文様を表している。長さ9cm、幅8.8cm、厚さ2.1cmの小片で、おそらく蓋形埴輪の一部と見ら れるものである。あげ土で確認されたため正確な出土地点は不明である。

27は板状の粘土を組み合わせた破片の接合部分で、図示した上部に平坦面がある。やや円弧を 描くものに粘土板を組み合わせているが、ヒレ付円筒埴輪とはやや角度が異なっている。あるい



第15図 出土盾形埴輪実測図(1/6)

は蓋形埴輪の一部とも見られる。非常に摩滅しており、指圧痕のみ確認できる。北部下段出土。 28は直線的に開く体部と非常に細く突出する突帯からなるものである。朝顔形埴輪の口縁部と も考えられるが、角度が異なり、突帯の形状も他の朝顔形埴輪には見られないことから不明形象 埴輪に含めた。外面は横ハケ調整し、体部径28.7cm。中央部上段出土。



第16図 出土盾形埴輪拓影(1/6)

盾形埴輪 (第15·16図) 今回 の調査で初めて今里車塚から盾形 埴輪の出土が確認された。盾形埴 輪は南部埴輪集中箇所に盾面を下 にした状態で出土しており、盾面 の大半と底部、体部の一部を復元 することができた。口縁部は確認 できず、図面は他の盾形埴輪を参 考に復元した。盾面は2枚の長方 形の粘土板で円筒部の一部を挟む ようにして作り出すもので、上辺 がやや狭くなっている。盾は上部 の破片が少ないものの文様から高 さ59cmに復元される。同様に上 辺は幅45cmに復元され、下辺は 幅52.5cmである。盾の厚さは1.3

~1.5cmで、盾中央の円筒部を利用した部分は薄く粘土を貼り付けて、高さ2mmの段差を作って いる。円筒部分は基底部で直径33.5cm、体部中央で31.5cmで、基底部の高さは18cmである。盾面 の上辺と下辺部分に突帯を巡らせ、その間にさらに3条の突帯を巡らせる。突帯は断面方形の大 形のもので、間隔は突帯の中心間で約14cmである。盾面と各突帯間には三角形の粘土板を入れ て補強している。側面には1段目と3段目に円形の透かし孔が認められるが他の段は不明である。 残された破片の円弧から透かし孔は直径6.5cmに復元される。

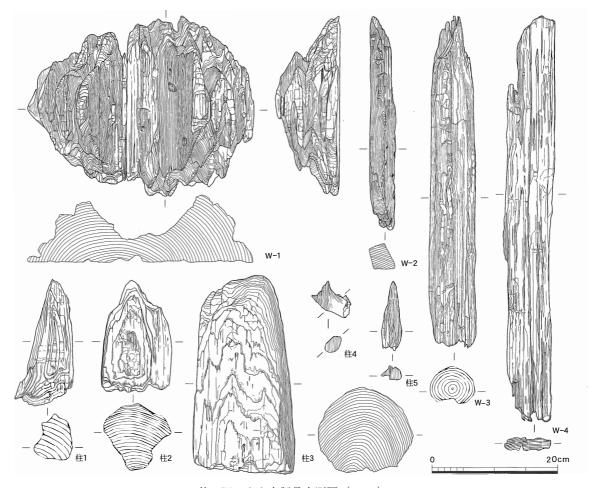
盾面の文様はすべて線刻で表される。まず盾の外縁から約1.5cmの余白を残して3.8~4.4cm幅の 外区を設け、さらにその内側を横長の長方形に上中下に3分割する。外区には外側に向かって平 行線で埋められた鋸歯文が描かれており、残された破片から、向かって右側は9個、左側と下部 が8個、上部が6個と推定される。四隅は対角線を描いた後に放射状の線で埋めている。内区の 中央部は横方向の直線を狭い間隔で描き、上下部は、中央部に接して横長の長方形を配してその 角から外区隅に伸びる直線を引いた後に縦方向と横方向の直線で埋めている。

盾面はほぼ全面に縦ハケが認められ、下辺の一部には横ハケが残る。盾の表面には部分的に赤 色顔料が残されており、中央部には黒斑が認められる。円筒部はかなり表面が荒れているが、基 底部に縦ハケとナデが、3段目の一部には横ハケが確認できる。

木製品(第17図) 今回の調査では木製品は4点出土している。今回は周濠の調査面積が非常に狭く、したがって木製品の出土も限られたものとなっている。木製品が出土した層はいずれも周濠下層の黄灰色粘土(第15層)と黒褐色粘土(第16層)の間である。なお個々の木製品の樹種鑑定は行っていないため材質は不明であるが、これまでの調査で出土した木製品ではヒノキ、コウヤマキ、カヤが確認されている。

W1は検出遺構でも述べたように柱3の南西2.5mにある浅い窪みから出土した。平面が円形、側面は丸味を帯びた山形を呈するものである。山形の反対側はほぼ平坦で、長径36.5cm、短径28.6 cm、高さ10.4cmである。山形の中央は木目の方向に沿って、幅約17cm、深さ約7cmにわたって断面U字形の溝状に彫り窪められている。全体に木目に沿うように深く溝状に風化しており、これまでに今里車塚古墳から出土している笠形木製品などと共通の特徴を有している。ただし上面のU字形の溝はこれまで小形笠形木製品では確認されておらず、また大形笠形木製品の様な中央の孔も存在していない。現段階では笠形木製品のバリエーションの一つと考えられよう。

W2はW1の北側2mのテラス斜面裾部で検出された物である。断面不定台形の角柱状のもので、各面はきれいに面取りされている。現存する長さは34.2cm、幅4.2cm、厚さ5.1cmである。一端は斜め方向に鋭い刃物で削り取られた痕があり、もう一端も斜め方向に先端が尖っている。この先端から約15cmまでは火を受けており、炭化して一回り細くなっている。今里車塚古墳で出



第17図 出土木製品実測図(1/6)

土する木製品には部分的に炭化した痕を残すものが多くあり、墳丘樹立状態での火災あるいは祭 祀終了後の焼却などの可能性も指摘されるが、明確ではない。

W3は調査地南端の壁面から出土したもので、当初は確認できなかったが、降雨による壁面崩 壊によって存在が明らかとなったものである。柱5の西3.5mにあり、ほぼ地山面に接して出土 している。表面は部分的に腐食しているが円柱状の形を良く残している。今回出土した木製品で は唯一の芯持材である。残りの良好な個所での直径は7.3cm、長さは53cmである。―端は腐食に よって先すぼまりとなっており、もう一端は逆に円錐形に凹む形になっている。本来もう少し長 い棒状の製品が腐食して折れたものと見られる。

W4は調査地西壁中央付近で確認されていたもので、こちらも降雨による壁面崩壊によって、 最終段階で掘り出すことができたものである。表面の残りはあまり良好ではないが、わずかに湾 曲する板状の木製品である。現状での長さ65.4cm、最大幅7.4cm、厚さ 2 cmである。材の両端に はわずかに面取りするように加工した痕跡が認められる。本来の形は不明であるがもう少し幅広 の材が木目に沿って割れたものの可能性もある。

柱(第17図) 柱はほぼ推定位置で5本が検出された。このうち柱5は、調査地南壁の断ち割 り時に確認できたものである。また柱1~4も検出遺構でも述べたように、墳丘盛土が被ってい たため、当初は発見できず、墳丘裾を削り込んでようやく確認できたものである。なお今回確認 できたものはすべて芯去材であったが、遺存状況の悪いものが多く、以前に指摘された様な太い 柱と細い柱が交互に並ぶという状況は把握できなかった。また柱も樹種の鑑定を行っていないた め不明であるが、過去の調査で樹種が明らかとなったものはすべてコウヤマキであった。

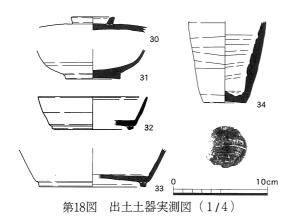
柱1は本来の柱の中心部付近が円錐形に残ったもので、現状での長さ28.2cm、長径9.4cm、短 径7.4cmである。検出時は柱の底部は柱掘形より若干上面で検出されている。

柱2は柱1に比べると若干残りは良く、先端は細くなるものの底部はほぼ平坦である。ただし 加工痕などは残っていない。長さ17.9cm、直径は11.3~11.7cmである。この柱も底部は柱掘形よ り若干上面で検出されている。

柱3は今回検出された中で最も遺存状態が良好なもので、長さは16.5cm、長径16.5cm、短径 13.3cmである。先端は他の柱のように先が尖らずに丸味を帯びており、底部は平坦である。今 回検出された5本の柱では、最も葺石基底石近い場所で検出されている。柱の直径に比して柱掘 形は小形で、柱の底部は掘形底部に接している。

柱4は今回検出された柱では遺存状況が最も悪いもので、おそらく柱材の節の周辺だけが残さ れたものと見られる。遺構検出時にも柱掘形は確認できたものの柱が見つからず、埋土を掘り下 げてようやく確認することができたものである。―端が鋭く尖り、残存する長さは6.3cm、長径 3.2cm、短径1.9cmである。

柱5も遺存状態は極めて悪く、調査地南壁に張り付いたような状況で検出された。先細りの小 さなもので、これもおそらく柱の芯の部分がかろうじて遺存したものと見られる。現存する長さ 11.1cm、長径3.8cm、短径2.3cmである。



土 器 (第18図) 今回の調査で出土した土器 は非常に少量で、図示できるものはさらに限られる。いずれも周濠内の堆積土中に含まれていたもので、他には耕作土・床土内の近世陶磁器類がある。これまでの調査では、周濠内埋土の下層はほとんどが木製品、その上の堆積層は葺石と埴輪片が大半で、古墳時代と見られる土器はほとんど見られない。次いで長岡京期の遺物を含む層があり、

平安時代の遺物を多く含む層が存在する。鎌倉時代の遺物は墳丘裾削平以後の堆積層に見られる。 今回の調査では周濠部分の調査面積が狭いこともあり、遺物量が少くなったものである。図示したものはすべて須恵器で、いずれも平安時代のものである。

30は杯蓋の天井部の破片で、金属器模倣の輪状つまみを持つものである。貼り付けによるつまみは直径4.2cm、高さは0.7cmで、内外面ロクロナデで、全面に煤が付着している。

31はケズリ出しの平高台を持つ杯である。体部は内湾しながら広がり、高台の中央はわずかに 凹んでいる。精良な胎土で淡灰白色に焼き上がり、内面には密な、外面には粗いヘラミガキを施 している。緑釉陶器の形態であるが、施釉は認められないため須恵器としてあつかった。高台径 は5.8cmである。

32は杯Bで、直線的に広がる体部を持ち、底部には断面方形の高台を貼り付けている。体部と高台の境はやや鈍い。底部外面には墨が付着する。口径11.6cm、器高3.5cmである。33は一回り大形の杯Bで、体部は大きく広がる。貼付高台を持ち、底部外面にはヘラ起こし痕が残されている。高台径は11.4cmである。

34は壺Gの体部片である。内面にはロクロ水挽きの凹凸を残すが、外面はロクロナデ調整により平滑に仕上げられる。体部下半には横方向に砂粒の移動が認められ、コテ状工具を当てた痕と見られる。底部には静止糸切りの痕が明瞭に残されている。全体に灰色に焼き上がり、胎土には白色粒子を多く含む。体部外面上部にはわずかに肩の稜が認められ、体部の高さは8.6cmと小型である。底部径は4.4cmである。

6 まとめ

今回の調査では、当初の目的通りに今里車塚古墳の墳丘を検出することが出来た。さらに今里 車塚古墳の大きな特徴である墳丘裾に巡らされた柱列もほぼ推定位置で5本確認された。

柱列に関しては、最初に確認された長岡京跡右京第12・26次調査(今里車塚第1・2次調査)において、芯去材の太い柱と心持材の細い柱が交互に並ぶと推定された。しかしその後の右京第352次調査(今里車塚第7次調査)では、芯去材と心持材は交互に並ばないことが判明し、太い柱と細い柱の順序は存在している可能性が考えられた。今回の調査ではそれが明らかになることが期待されたが、遺存状況の悪いものが多く、残念ながらこれに関しては不明な点が多い。

今回の調査における成果として、この柱列が古墳築造のきわめて早い段階で設置されていたこ とが判明した点があげられる。これまで柱列に関してはテラス部分で検出されていたため、ある 程度墳丘が完成した段階で設置されたと考えられていた。しかし柱掘形は墳丘盛土に完全に覆わ れており、この個所では、墳丘の裾部斜面から柱が樹立していたと見られる。さらに墳丘盛土は 堆積状況からこの柱列を基準にして積み上げられていった可能性があり、柱列の機能に関して新 たに築造の基準としての性格が考えられることとなった。ただしこれによって、木製埴輪との組 み合わせが否定されるものではなく、基準のためだけならば杭でも良いわけであり、むしろ複数 の機能を有していた可能性が指摘出来るであろう。

次に周濠西側の肩が確認され、これまでの調査成果とあわせ、今里車塚古墳の周濠平面形が長 方形を呈することが明らかとなった点がある。このような周濠形態を持つものとしては現在のと ころ大阪府交野市にある5世紀の交野東車塚南古墳が知られるのみである。この古墳は直径22.4 mの円墳の周囲を一辺26.5~28.8mの方形の周濠が巡るもので、別名「日の丸古墳」とも呼ばれ る。時期や、墳丘形態も異なるため直接的な比較は出来ないものの、唯一の類例として注目され よう。ただしこれらの性格に関して言及することは現時点では困難である。

出土遺物では、今回初めて確認された盾形埴輪と冑形埴輪が注目される。盾形埴輪は今里車塚 古墳では初めて出土したもので、さらに盾の形状は弥生時代の系譜を引く木製盾を表している点 で注目される。同様の系譜上にある盾形埴輪は乙訓地域では、向日市乾垣内遺跡や長岡京市長 法寺南原3号墳で確認されているが、いずれも円筒部の両側にヒレを貼り付けた盾面が曲面と なるもので、今回検出された盾形埴輪とは形態が異なっている。現在のところ乙訓地域では今里 車塚古墳のみの例であるため、今後検討を要するものであろう。

また冑形埴輪も乙訓では初めて出土した珍しいものである。冑形埴輪は盾形埴輪のすぐ近くか ら出土しており、武具類が固まって樹立されていた可能性が高い。冑形埴輪は甲と組み合うもの、 盾形埴輪と組み合うもの、そして円筒埴輪の上面に乗る形で単独に存在するものがあるが、今回 の調査では甲形埴輪は出土しておらず、検出状況からも盾形埴輪と組み合う可能性が高いと見ら れる。その場合は盾形埴輪の上部は今回復元した形態とは異なり、冑形埴輪を受けるように先す ぼまりになるものと見られる。

この他に注目されるのは、肩部に竹管文を持った朝顔形埴輪がある。先にも述べた如く、この 竹管文の類例は京都府与謝野町谷垣遺跡出土の特殊円筒棺口縁部に認められるが、今回出土の朝 顔形埴輪は肩部の器壁が薄いため、大きく広がる口縁部を持たないいわゆる丹後型埴輪となる可 能性も考えられる。この場合は丹後地方との関係が非常に強く意識されるものとなる。ただし現 段階ではその可能性を指摘するにとどめ、今後の検討課題としておきたい。

最後になったが、本報告整理中の平成17年11月23日、今里車塚古墳を最初に調査され、木製埴 輪の存在を初めて紹介された滋賀県立大学名誉教授の高橋美久二先生が62才の若さでお亡くなり になった。乙訓の文化財保護に尽力され、今回の調査でもいろいろとご教示を賜っていただけに 残念でならない。慎んでご冥福をお祈りいたします。

- 注 1) 高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」『京都府概報 (1979)』1979年 高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『京都府概報 (1979)』1980年
 - 2) 石尾政信「長岡京右京第84次発掘調査略報」『京都府センター概報』第3冊 1982年
 - 3) 木村泰彦「長岡京跡右京第352次調査概要」『長岡京市報告書』第27冊 1991年
 - 4) 山本輝雄他「右京第488次調査略報 | 『長岡京市センター年報』平成6年度 1996年
 - 5) 岩崎 誠「長岡京跡右京第582次調査概要」『長岡京市報告書』第38冊 1998年 岩崎 誠「長岡京跡右京第582次調査概要」『長岡京市報告書』第39冊 1999年
 - 6) 岩崎 誠「右京第832次調査概報」『長岡京市センター年報』平成16年度 2006年
 - 7) 田中彩太「特殊円筒棺の諸問題」『古代文化』第34巻第7号 1982年
 - 8) 山下通夫「方形堀円墳」『郵政考古紀要』 VI 1982年
 - 9)梅本康広「乾垣内遺跡調査概要」『向日市報告書』第47集 1998年
 - 10) 木村泰彦・清家章「南原東 3 号墳の調査概要」『長法寺南原古墳の研究』(『長岡京市報告書』第30 冊) 1994年

付表-1 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書 名	長岡京市文化財調査報告書
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第49冊
編著者名	木村泰彦、橋本清一
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所 在 地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

_										and the second s
Ī	听収遺跡名	所 在 地	市町村	- ド 遺跡番号	北緯	東	経	調査期間	調査面積	調査原因
	がまかきようあた 京	ながおかきょうしいまざと 長岡京市今里 4丁目11-4他	26209	107 32 31	34度56分1秒	135度 39	41分 秒	20060419 \(\) 20060530	82 m²	共同住宅建設工事

所収遺跡名	種	別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡今里遺跡今里車塚古墳	都集古	落	長岡京期 旧石器~室町時代 古墳時代	墳丘裾・葺石 木柱・周濠	土師器、須恵器 土師器、須恵器、瓦器 円筒埴輪、朝顔形埴輪、 ヒレ付円筒埴輪、盾形埴 輪、冑形埴輪、木製品	200 000 000 000 000 000 000 000 000 000

[※] 緯度、経度の測点は第1トレンチの中央で、国土座標は旧座標系を使用している。

図 版



(1)調査地全景(西から)



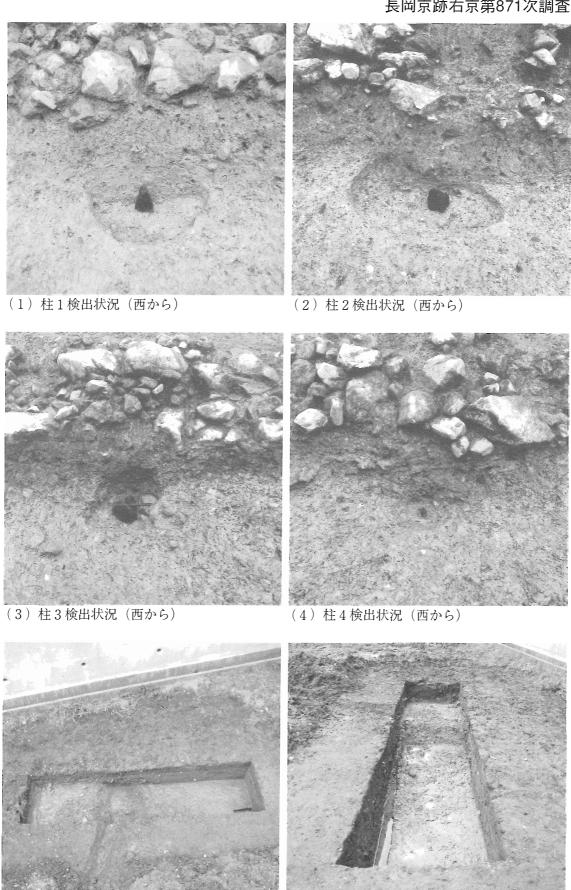
(2) 第1トレンチ全景(北西から)



(1) 葺石検出状況 (南西から)

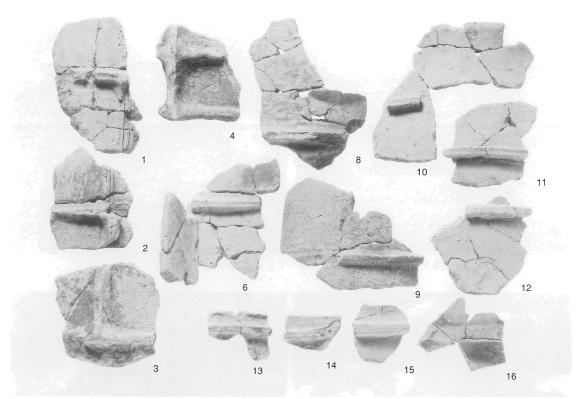


(2) 墳丘・柱列検出状況 (南西から)

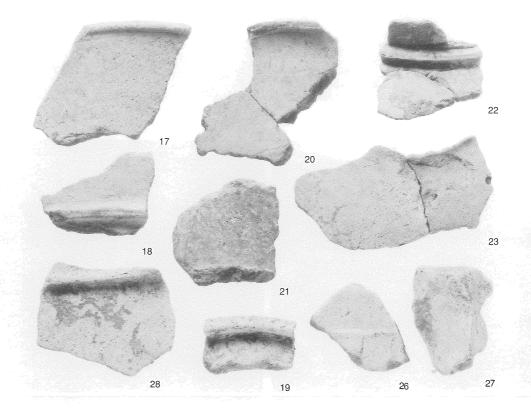


(5) 第2トレンチ全景(南から)

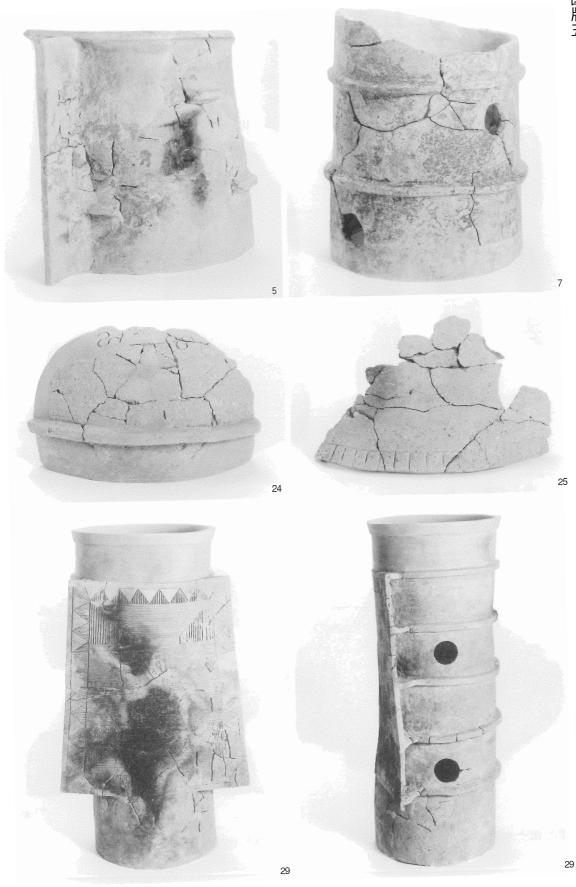
(6) 周濠西肩検出状況 (東から)



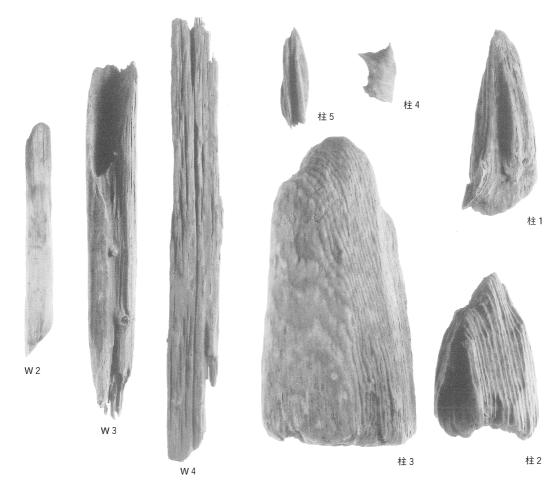
(1) 円筒埴輪・ヒレ付円筒埴輪



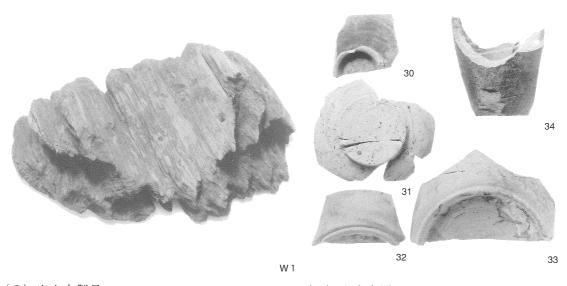
(2) 朝顔形埴輪・形象埴輪



出土埴輪



(1) 出土木製品・柱



(2) 出土木製品

(3) 出土土器

長岡京市文化財調査報告書 第49冊

平成19 (2007) 年 3 月 28日 印刷 平成19 (2007) 年 3 月 30日 発行

編 集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター 〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1 電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

発 行 長岡京市教育委員会 〒617-0851 京都府長岡京市開田一丁目1-1 電話 075-951-2121(代)

印 刷 ヨシダ印刷株式会社 〒604-8277 京都市中京区西洞院通り御池下ル 三坊西洞院町572 NOA高松殿ビル 6 F 電話 075-252-5421 (代)